

ふるさとの杜の再生を目指して —海岸防災林で植樹会を実施—

市では、市民やNPO、団体、企業等と協力し、震災で大きな被害を受けた東部地域の緑の再生を進める「ふるさとの杜再生プロジェクト」を実施しています。



3月24日に、若林区の荒浜字南官林地区の海岸防災林において、植樹会を開催しました。七郷地区の町内会や七郷小学校の児童など地域住民の皆さんや緑の活動団体

支援団体・企業、公募の市民など約400人が参加。復興支援として、ドングリの実から苗木を育てている向山小学校の児童や八乙女中学校の生徒も参加しました。

開会式で郡市長は、「ふるさとの杜の再生は短期間には実現できず、育てるためには多くの力と時間が必要となります。継続的に、一緒に育てていきましょう」とあいさつをしました。

植栽された苗木は、クロマツやヤマザクラなど約3650本。そのうちヤマザクラやカスミザクラの苗木270本は、株式会社橋本店から寄贈されたものです。

親子連れも多く参加し、前々日の雨で足元がぬかるむ中、子どもたちは泥だらけになりながら丁寧に苗木を植えていました。

今後も、東部地域が緑豊かな景観を取り戻し、人々が集う場となるよう取り組みを続けていきます。

市では、県内被災地の早期復興を支援するため、県内市町へ職員

を派遣しています。本年度は、昨年と同数の27人を派遣しました。派遣先は、気仙沼市、石巻市、名取市など県内9カ所の自治体等です。今回石巻市に派遣される保健師は復興公営住宅入居者の健康管理などの業務に、土木職や建築職などその他の技術職員26人は、下水道施設等の復旧業務や区画整理、公共建築などの業務を担当し、沿岸地域の復興に従事します。



▲3月23日に、派遣期間満了を迎える職員の表彰式と新たに赴任する職員の訓示式を行いました

日本郵便株式会社と 包括連携協定を締結

仙台市は、地域社会の活性化と市民サービスの向上を図ることを目的に、日本郵便株式会社と包括連携協定を締結しました。

日本郵便株式会社とは、これまでも災害時における相互協力や生



活環境等の情報提供、子どもの安全確保や高齢者・障害者の見守り、がん啓発および検診受診率向上に関しそれぞれ協定や覚書を締結し、相互に連携して取り組んでいます。

今回新たに①本市の魅力発信・活力向上②子育て環境の充実③ごみ減量・リサイクル推進、まちの環境美化④その他地域社会の活性化および住民サービスの向上に関する4項目を連携事項に追加した包括連携協定を締結しました。

3月29日に、市役所本庁舎で協定締結式を開催し、郡市長は「地域コミュニティの核でもある郵便局と連携して、市民生活の向上を図るとともに、仙台の魅力発信していきたい」と話しました。

市役所本庁舎建て替えワークショップを開催しました

市役所本庁舎は、昭和40年の建設から50年以上が経過し老朽化が進んでいるため、市では早期の建て替えを検討しています。3月3日に、基本構想策定に向け、市民の皆さんにさまざまな視点で意見をもらう「市役所本庁舎建て替えワークショップ」を開催しました。



▲ワークショップでは、15年後の市民に愛される市庁舎についても話し合いました

ワークショップには、防災や市民活動などを行うさまざまな団体から市民の方33人が参加。専門家による海外や他都市の事例紹介の後、参加者同士で新庁舎のコンセプトや機能について話し合いました。参加者からは、「新庁舎が若者からお年寄りまであらゆる世代が気軽に立ち寄れる場所になれば」という意見が出ました。

「協働まちづくりの実践」協働まちづくりの手引きを作成

本庁舎建て替えについては、有識者の検討委員会も開催しており、本年度中に基本構想を策定し、その後の基本計画の策定に向けて検討を進めていきます。

市では、多様な方々の参加による協働のまちづくりを推進していきます。このたび、市内で協働で行われているまちづくりの事例を紹介する冊子「協働まちづくりの実践」を、学生や社会人などの市民ライターやNPOと共に作成しました。併せて、協働に取り組む人や関心のある人向けに、協働の考え方や進め方をまとめた「協働まちづくりの手引き」も作成。

どちらも、市役所二日町第四飯庁舎2階市民協働推進課と仙台市市民活動サポートセンターで配布しているほか、市ホームページでもご覧いただけます。



3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本を「紹介します」。

被災した人々の言葉を聞き取ることから
フリーライター 西大立目 祥子

「津浪と村」



山口弥一郎／著
石井正己・川島秀一／編
三弥井書店 刊



街からの伝言板プロジェクトチーム編
植田今日子／監修
ハーベスト社 刊

「街からの伝言板」は、仙台市と東北学院大学の研究者がプロジェクトチームをつくり、東日本大震災のとき仙台市中心部の人々がどう動いたかを、聞き取りしてまとめた一冊です。サブタイトルは「次の地震に遭う人に、どんな伝言を残しますか」。

三陸沿岸は東日本大震災の前にも、明治以降3回、深刻な津波被害を受けています。「津浪と村」の著者、山口弥一郎は、昭和8年の昭和三陸津波の後、地理学と民俗学の深い見地と想像力を持って浜を訪ね歩きました。そして、被害の大きさや漁業など生業の復興、家々の移転などを人々から聞き取りし分析して、昭和18年に成果を世に送り出しました。命を救うための言い伝えの大切さ、集落の移転の難しさなど、今、被災地を抱えるのと同じ課題が取り上げられていて驚かされます。

この研究成果を今こそ役立ててほしい。そう願った東北ゆかりの2人の研究者が編み直した

※紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・15805